琉球大学学術リポジトリ

生涯スポーツとしての沖縄空手 (1) : 空手人口の動態

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2014-11-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 金城, 光子, 外間, 哲弘, Kinjo, Mitsuko, Hokama, Tetsuhiro メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/29951

生涯スポーツとしての沖縄空手(1)
～空手人口の動態～

金城光子・外間哲弘

Guidance of Learning Okinawan Karate (1)
～The Movement of Karate-Population～

Mitsuko KINJO* • Tetsuhiro HOKAMA**
(Received Oct. 29, 1993)

Abstract

This paper is a case study of Okinawan Karate, one of the Traditional Okinawan Martial Arts, as a lifelong exercise. The Karate-population ranges over all ages and sexes, which indicates the possibility of Karate to be one of the lifelong sports anybody can go on. As the first step to prove the position of Karate in our daily life, therefore, the main concern of this paper is the research of the Karate-population in Okinawa.

はじめに

成人教育、社会教育、生涯教育という形態は、学校教育に対して一般市民を対象とした学習の場を設定するために推進されてきたことは周知のとおりである。

特に、昨今は、生涯教育が生涯学習という名称で呼ばれるようになり、教育という指導者の立場からのあり方が、学習主体は学習者の自主・自発性にウェートがおかれるシステムに変化してきた。

本稿は、「生涯学習」に着目し、特に沖縄県における伝統的なスポーツの振興と推進の方向を考える目的ですすめることがねらいである。

ところで、沖縄には古来からの身体活動、あるいは体育スポーツとしてとらえられる、いわゆる伝統に根ざしたスポーツ「空手、すもう、村棒、古武道」等があり、伝承スポーツとして各地域で保存継承されてきていることは周知の通りである。

生涯学習を考える上で、この伝統的スポーツを、沖縄の独自性と固有性の特性をもつものであると捉え、これら伝統的スポーツを、生涯学習との関連で、基本的な理念と方法論等を体系づけることにより、広く一般市民の学習の楽しさや健康づくりのためになりうるよう配慮することは望ましいことであり、生涯スポーツとしての発展の可能性があるものと思われる。

生涯学習を継続させ進展させるための基本的な条件として、波多野[3]は次のように述べている。

- 学習の過程を楽しむこと。
- 学習仲間をつくり交流すること。
- 学習成果のよろこびを体験させることである。

生涯学習を継続させ推進することは単なる机上論ではなく、実践活動をすすめ人々の認識と参加が要件であることは言及するまでもない。

学習すること及び継続するためには個人をとりまく周辺の人々の協力と個人の意欲的実践活動が

* Phys. Educ., Coll. of Educ., Univ. of the Ryukyus.
** Tomari High School.

必要となる。いわゆる、生涯学習は、①学習者の心身の健康の維持に寄与しなくてはならない。②家族の理解と協力は欠かせない事項である。③個人とその周辺をとりまく人々や環境とのバランスが必要である。

生涯スポーツとして「空手」を位置づけるためのステップはまず、沖縄県内（外）における人口動態の実態を把握する必要があるものと思われ各種団体・組織、競技大会等を含めた空手人口をみることにしたい。

「生涯スポーツ」の条件があるとすれば、おそらく、「空手スポーツ」を精神性と身体活動（肉体性）とを結合させることや社会体育の振興との関わりも重要であると思われる。

現在の日本は、プロスポーツやアマチュアスポーツ、学校体育や草野球に及ぶ「スポーツ遊び」などに小さい子供から老令者までスポーツに熱中している時代であるとみることができる。「スポーツを行なって楽しむ」、「観戦することによって楽しむ」なども人々のスポーツとの関わりと考えることができよう。スポーツを好む少年少女及び一般市民は各自の適性によって選択し楽しく活動しているように思われる。

現在は体育スポーツが本来のものとして追求される時代になったことといわれていることは言及するまでもない。

とりわけ、「生涯学習としての沖縄の伝統スポーツ」を検討することの意義を明確にし、その可能性の方法と方向の具体策を考えなくてはならないと思われる。いうまでもなく、「生涯学習」の基本的要件は「心身の健康」である。いいかえれば、「健康」は「生涯学習」の基本である。自ら学び、その学び方を指導することこそ生涯続けられる学習を可能にするものといえよう。

1　沖縄の伝統的スポーツの種類と特性

沖縄の伝統的スポーツの種類は次の4種類に大別される。

＜伝統スポーツの種類＞

1　空手
2　古武道
3　村棒（棒術）
4　沖縄相撲

2　伝統スポーツの特性

上記の伝統的スポーツの特性を把握することで、生涯学習に資する基礎的、基本的条件を配慮したい。

(1)　空手の特性

空手は、相手の動きに応じて攻防しあう対人的スポーツ、武道としての特性をもっている。空手の技術は身体各関節の迅速な屈伸運動を伴ない人体の各部位を究極的に鍛錬するという発想に基づいた技能である。したがって、空手は全身のあらゆる部位を直接攻防に使用する。

空手の運動原理は、筋の瞬間的活動によるエネルギーの利用という点に基づいて「瞬発力、集中力」の養成に役立つものであり、空手の動作は無理がなく、五体機能や内臓が強化され、健康な体力づくりの方法としてすぐれているといえる。

空手は「徒手空拳」をもって身を守る武道であり、老若男女、狭い場所でも1人でも練習できる。また、空手競技を通じて相手を尊重し、ルールや規律を守る態度が養われ、青少年育成に役立つものである。

空手は、技能の修得過程で心身が鍛錬され、人格の形成に役立つ、「型をおぼえた喜び、楽しみ」が更に次の段階へと高まっていく。又、空手は、沖縄に古くから伝承されてきた歴史をもち、型の修業過程で、いわゆる「忍耐力」を培う。

戦後は、国際的な普及振興によって国際的大会が開催され、沖縄の伝統スポーツの発展に大いに寄与しているのが現状である。

(2)　古武道の特性

空手が素手で演武競技するのに対し、古武道は「器具（武器）」を使用して攻防の術を習得するものである。また、空手同様、肉体的訓練を通して精神の統一、人格形成に役立つ。

「礼に始まり礼に終わる」秩序ある作法を体得し、武器を使用する技術故に「安全に対する注意」が最も重要な条件を要する武道である。

技術は、相手のすきをついて古武道具で打ちこんだり、防いだりすることを競う。したがって、

「相手を尊重する態度や姿勢」「安全に対する注意を保持する態度」と「規律」が要求される。

(3) 村棒（棒術）の特性

沖縄の各地域に伝承され、その地域の人々の和を保つことに役立っている。

年中の民俗行事や信仰行事と共に演じられ、その「村の伝承スポーツ」として誇りと自信につながっている。

村の拝所、御嶽、聖地などで練習し公開するので、村々の聖地に対して崇高な精神理念を確立させる手段となっている。

町村の「指定無形文化財」としての伝承スポーツとして村棒は、古くから「人から人へと技能が伝承される」形態をもち、村棒に対する理解を深めると共に、幼少の時から初歩的基本的技能を身につけ、礼節を重んじ、安全に心がけ自ら進んで単独でも練習し、技能の型をおぼえ、心身の鍛錬と次代への伝承を継続しているのが現状である。

(4) 沖縄相撲・角力の特性

沖縄相撲は、土俵の中で直接相手と「右四つ」に組み、「引き技、乗せ技、投げ技、かけ技」などの技術があり、競技の勝負は相手の背中（両肩）を地面につけることできまる。

各村における地域の祭り行事と共に競技会が開催され、村民の融和と団結心につながり、コミニケーションの場としての役割を果たしている。

また、青少年の健全育成と体力維持にもつながり、心構えは「礼儀や相手を尊重する態度」、「安全に対する注意」が培われる。

日本相撲の競技の在り方と、沖縄相撲の差異が理解でき相撲への興味を高めるのに役立っている。

技能的特性はもとより村民の共同体意識の高揚と密接に連関し、レクリエーション的内容をもつ“諸人（しょにん）シ“マ”または、“衆人（しゅにん）シ“マ”といわれ、「楽しみ」と「力比べ」と「勝敗のゆくえ」を見とどける観戦者が競技をもりあげていることは大きな特色である。

3 沖縄空手の歴史的概要

沖縄は「琉球」と呼ばれていた時代から日本本土の各県と異なる独自の無形有形文化を形成し、固有の伝統様式を生みだしてきたといえよう。

過去の沖縄は、中国をはじめ東南アジア、日本、朝鮮などの国々と交易をもち、優れた文化を積極的に導入する機会と姿勢をもってきた。これは、四面海にかこまれた孤島の地の利をいかした活力と生命力にあふれた民族の基盤を築き上げたといえよう。

沖縄空手の発生については、これまで多くの研究結果が報告されている。しかしながら「空手道」が「いつ発生し」「体系化された」かについては、明確に論じられていないのが現状である。

空手の「技能」については、実演家や伝承者が現存しながら史的検討が十分でない面があり文献資料も乏しく、このことは、いわゆる「口伝の伝受」の方法で継承される面がその原因のひとつと思われる。

口伝によると、沖縄の空手の歴史的背景として中国拳法が沖縄に伝承されて技能や型が、定着したのではなく、琉球古来の「手（ティー）」が存在したとされている。また、その「手」は中国拳法や南方系の武術の技能や型の影響を受け現在に至っているという説は当を得ているものと思われる。

「空手」の呼称は<手（ティー）>→<唐手（トウディ）>→<唐手（カラテ）>→<空手>→<空手道>という歴史的時流と共に歩んできている。

「流派」については、型の特徴、教練方法、または伝承地などが複雑に交さくしており本来の流派の原点とされる名称は、「首里手（スイディ）」「那覇手（ナーファディ）」「泊手（トマイディ）」の三つが明確にされている。

昭和期に日本の柔道や隣国の武道との交流が日本本土において盛んに行われたことによって、空手は、沖縄の古い呼称ではうまく対応出来なくなり、「首里手」、「那覇手」「泊手」などは次第に呼称も変化してきたといわれている。

昭和４年に宮城長順氏が「剛柔流」を名乗り、昭和７年に「半硬軟流」から「上地流」を上地完文氏が、さらに、昭和８年、「首里手」から「小林流」を各のった経緯がある。

知花朝信氏が、昭和14年、「首里手」から「松濤館流」、船越義珍氏が名乗り、それぞれ「流派」は「修練」、「鍛錬法」と「技法」と「フォーム」を体系づけたとみられる。

昭和15年以降は、表９の「県内の流派別空手道場一覧表」に示すような流派が発生し今日に至っ

ている。

4　生涯スポーツとしての沖縄空手

昨今の日本は高齢化社会に対応すべく学校教育や社会教育の在り方や生涯学習の基本的姿勢もその方向を示しつつあるというよう。

そのような時機に国民のスポーツ活動や心の健康に対する関心もたかまり、余暇時間の増大で趣味、スポーツを実践する人口も着実に増加しているのが現状である。

成人のサークル活動も増加し、青少年を含めた人々の生涯学習への関心と実践がすでに開始されている。

生涯学習の基本は、「学習過程の中で、仲間づくりをし、楽しみ、運動不足の解消と体力の維持」、すなわち、「心身の健康」である。

生涯を通して楽しみ、生涯スポーツとしてのあり方を「空手」や「古武道」にみいだし社会体育と連係を密にすすめるべく検討をすべきである。

空手をする人の中には幼少時代、虚弱体質であったがゆえに、空手道場に入門したともいわれ、空手をする動機が、健康になる為だと答えている例もある。

空手の特性は、先述のように老若男女、いつでもどこでも、1人でもその条件にあわせてできるスポーツであるということである。したがって、競技や鍛錬にこだわることなく、軽度の柔軟運動を部分的にとり入れたスポーツ運動と考え基本的方法としては、空手独特の「呼吸方法」として「臍下丹田」に力を入れ、おもいっきり「呼吸」をすることである。

今日では、空手、太極拳の呼吸方法は健康にすぐれた方法であるという報告がなされている。健康な身体づくりは、身体活動と呼吸方法の調和である。呼吸方法が内臓諸器官を強化し、健康増進を図りつつ、各自にあった楽しいスポーツとして「空手」を生涯学習に位置づけするためには内容と方法を検討することが重要な条件であると思われる。

空手の本場、沖縄に、生涯楽しめる空手の学習プログラムづくりをし、子供から老人まで「楽しい空手学習」をし、心身を健やかに楽しく過ごしていくことは可能である。

5　現存する沖縄の組織体

沖縄における空手道団体組織の主な組織体を示したのが**表1**である。

これらの組織体は年次毎または隔年ごとに演武大会や競技大会を開催し、大会は、空手道と古武道の演武及び競技を内容としている。大会参加者の階層と参加者数は**表2**の通りである。表のように、幼児と大学生が500人で、中学生2,000人、熟年1,500人で、小学生の3,000人と一般の4,000人が最も多い参加者数となっており、又、小・中・高校生の空手競技参加は年次毎に増加する傾向にある。

表1　現存する空手の組織体

1	全沖縄空手道連盟
2	沖縄県空手道連盟
3	沖縄空手道懇話会
4	全沖縄古武道連盟
5	沖縄空手道協会
6	沖縄空手道小林流小林館協会
7	琉球古武道保存会
8	沖縄剛柔流拳志会空手道古武道
9	沖縄県学生空手道連盟
10	その他、それに属しない連盟

表2　演武及び競技者の階層と参加者数

分　類	人　数
幼　児	500人
小学生	3,000人
中学生	2,000人
高校生	3,000人
大学生等	500人
一　般	4,000人
熟　年	1,500人
合　計	14,500人

（平成元年から平成5年現在）

(1)　全沖縄少年少女大会における年次別参加状況

少年少女大会は、平成元年から開催され現在に至っている。本年（平成5年）が第5回目の大会

である。表3、4、5、6、7は1989年から1993年までの5年間における空手道大会の参加状況を示したものである。

表3のクラス別参加者状況をみると、低学年（1年～2年）は、80チームで241人、中学生（3年～4年）は、132チームで395人、高学年（5年～6年）は、153チームで467人、中学校は（1年～3年）97チームで290人で、クラス学年の参加道場数は109で、全チーム数462チームとなり演武者総数は1,393人となっている。

表4のクラス別参加者状況は、低学年（1年～2年）は、114チームで342人、中学年（3年～4年）は、217チームで651人、高学年（5年～6年）は、224チームで672人、中学校は（1年～3年）、132チームで396人でクラス学年の参加道場数は・・・で全チーム数687チームとなり演武者総数は2,061人となっている。

表5のクラス別参加者状況をみると、低学年（1年～2年）は、152チームで470人、中学年（3年～4年）は、251チームで760人、高学年（5年～6年）は284チームで866人、中学校は（1年～3年）170チームで520人でクラス学年の参加道場数は150人で全チーム数857チームとなり演武者総数は2,622人となっている。

表6のクラス別参加者状況をみると、低学年（1年～2年）は、157チームで482人、中学年（3年～4年）264チームで804人、高学年（5年～6年）301チームで922人、中学校は（1年～3年）164チームで497人でクラス学年の参加道場数は150で全チーム数886チームとなり演武者総数は2,705人となっている。

表7のクラス別参加者状況をみると、低学年（1年～2年）は、168チームで519人、中学年（3年～4年）は、262チームで803人、高学年（5年～6年）は、275チームで846人、中学校は（1年～3年）155チームで474人でクラス学年の参加道場数は139で全チーム数860チームとなり演武者総数は2,642人となっている。

以上のように、空手競技大会の団体、チーム、年令階層等は、年々増加する傾向にあり、「演技や型の技能の向上」にも目をみはるものがあり、技術の高まりと共に、空手人口の増加などの実状からみてもわかるように、県内における「空手スポーツ」愛好者は競技に参加していない人数を道場や同好会グループの実態を含めた形で推定しても、年々増加しているとみられる。

「空手スポーツ」を行なうねらいは、専門的な技術を身につけ、段位取得の目的で型や対人技を修業する者を除いてみると、「健康になるため」、「仲間つくり」のため、「楽しく学習し友好を深める」など各自が空手に対する態度は独自のねらい

(2) 全沖縄少年少女空手大会の年次別参加者数

表3　第1回大会（1989（平成元年）9. 24那覇市民体育館）

大会の申し込み状況

クラス（学年）		チーム数	人数	
小学校	低学年　1～2年	80チーム	241人	1,103
	中学年　3～4年	132チーム	395人	
	高学年　5～6年	153チーム	467人	
中学校　～　1～3年		97チーム	290人	
合　計　道場数　109		462チーム	1,393人	

表4　第2回大会（1990年（平成2年）7. 15沖縄コンベンションホール）

大会の申し込み状況

クラス（学年）		チーム数	人数	
小学校	低学年　1～2年	114チーム	342人	1,665
	中学年　3～4年	217チーム	651人	
	高学年　5～6年	224チーム	672人	
中学校　～　1～3年		132チーム	396人	
合　計　道場数		687チーム	2,061人	

表5　第3回大会（1991年（平成3年）沖縄コンベンションホール）

大会の申し込み状況

クラス（学年）		チーム数	人数	
小学校	低学年　1～2年	152チーム	470人	2,096
	中学年　3～4年	251チーム	760人	
	高学年　5～6年	284チーム	866人	
中学校　～　1～3年		170チーム	520人	
合　計　道場数　150		857チーム	2,622人	

表6　第4回大会（1992年（平成4年）3. 12沖縄コンベンションホール）

大会の申し込み状況

クラス（学年）		チーム数	人数	
小学校	低学年　1～2年	157チーム	482人	2,208
	中学年　3～4年	264チーム	804人	
	高学年　5～6年	301チーム	922人	
中学校　～　1～3年		164チーム	497人	
合計　道場数　159		886チーム	2,705人	

表7　第5回大会（1993年（平成5年）7. 18沖縄コンベンションホール）

大会の申し込み状況

クラス（学年）		チーム数	人数	
小学校	低学年　1～2年	168チーム	519人	2,168
	中学年　3～4年	262チーム	803人	
	高学年　5～6年	275チーム	846人	
中学校　～　1～3年		155チーム	474人	
合計　道場数　139		860チーム	2,642人	

をもって望んでいるといえ、このことは生涯スポーツとして望ましい傾向にあるといえる。

(3) 少年少女空手演武大会における年次別クラス学年別人員数

図1は表3～表7までの5年間における少年少女空手演武大会における年次別小学校中学校クラス学年別チーム数と参加数を図式化したものである。この図からみられるように年次別のクラス学年別のチーム数及び参加者数は1992年が886チームで2,705人と最も多い。

次に1993年の860チームで2,642人、3番目に1991年857チームで2,622人となり、4番目に1990年687チームで2,061人で5番目に1989年462チームで1,393人となっている。

これらの状況から少年少女の空手大会参加チームと参加者数が、随時増加しているものとみられるが、特に、1992年度はやや数的に434人の減少がみられる。

(4) 沖縄県における空手選手権大会

戦前までは、道場別の演武大会が個別に開催したのが実状であったといわれている。

また、空手は年中行事や祭りと深くかかわりあい、村々、字々の綱引行事の演武、公民館での演武により技を披露し鑑賞するという形式で行われていた。したがって、空手の演武を見るという。

鑑賞する役割をも果たしていた。また、各流派や指導者はトレーニングや奥義のようなものを一般市民に公開せず、閉鎖的要素が強く堅持されていた。

したがって、沖縄全体の諸組織体が一堂に会して演武し競技するという事は殆んどなく、それが各流派の「型」の保有継承の方法の特色でもあった。

空手の本場沖縄では、明治時代、学校において集団で公開するようになって以来秘密主義から次第に公開するようになっていったようである。

公開方法は、「型や古武道」などを公開するのが主流であったが、1970年代頃から「組手試合」がふえる傾向にあった。

現在では少年少女の人材育成と空手人口の底辺づくりをねらいとして、「全沖縄少年少女空手大会」が開催されるようになっている。

少年少女の低年令層の子供たちの空手スポーツに対する認識も高まり、仲間と楽しく友好を深めるふんいきの中で、各自の出来る範囲や体力等の適性に合う空手技能の習得をしているのが現状である。これらの底辺づくりは、いわゆる生涯学習としての伝統的スポーツを考える上で有効であり、人口増加の方法として、「沖縄空手少年団」「沖縄空手少女団」などの組織の構成と指導者の養成も今後の課題としていく大きな要件である。

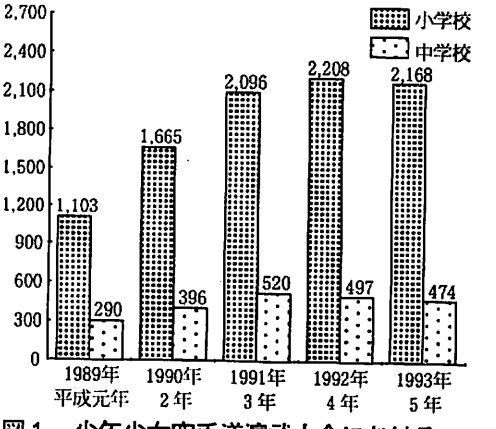


図1　少年少女空手道演武大会における年次別クラス学年別人員数

現在は、正式な組織的なものではないが、各地域における「空手青少年少女愛好会」があり、独自の練習方法で、青少年少女の心身の健康をねらいとし、楽しく学習できる場を考案しつつ実践している。

沖縄県内における過去の道場での空手の継承法としての予習・復習の方法は、「型と古武道中心主義」の感があり一般市民への広がりよりも専門家的復習形で行われていた。

近年になって、日本本土との試合形式が増加し、内容も「演武大会」から「空手選手権大会」形式に変容した。

1950年代におけるは各流派合同演武大会の目的と内容は、追悼演武大会、個人道場単位演武主流の時代で、1960年代は「組織的演武大会」、「琉米親善大会」、「連盟、振興会」などのタイトルがふえてきた。さらに、60年代後半は「選手権大会」が開催されるようになり競技大会にふさわしい内容となった。1970年代は、「何周年大会」、「選手権大会」が主流となってきた。これは、キックボクシングの刺激もあった様である。

1980年代は、「海外との交流大会」、「海外での指導」がめだつような「演武形式」になった。

1990年代は、沖縄県やマスコミが直接、間接に空手界にタッチするようになり、「世界武芸祭」、「世界のウチナーンチュ大会」、「少年少女大会」、「国際交流試合」など県内外を含めた大きな大会へと変容してきた。

表8　沖縄県内の空手道選手権大会年次別大会数

年次	1957年	1958年	1959年	1960年	1961年	1962年	1963年	1964年
回数	2	5	2	2	3	4	5	4
年次	1965年	1966年	1967年	1968年	1969年	1970年	1971年	1972年
回数	4	5	5	5	5	7	7	8
年次	1973年	1974年	1975年	1976年	1977年	1978年	1979年	1980年
回数	10	6	10	10	7	8	8	10
年次	1981年	1982年	1983年	1984年	1985年	1986年	1987年	1988年
回数	13	14	15	11	12	17	15	12
年次	1989年	1990年	1991年	1992年	1993年	1993年10月現在		
回数	21	20	20	20	14	合計 346 回		

第8表は1950年代～1990年代の沖縄県内における年次別大会数を示したものである。表8と図2からみられるように年々演武大会がふえていることがわかる。
<1957年～1993年の調査>

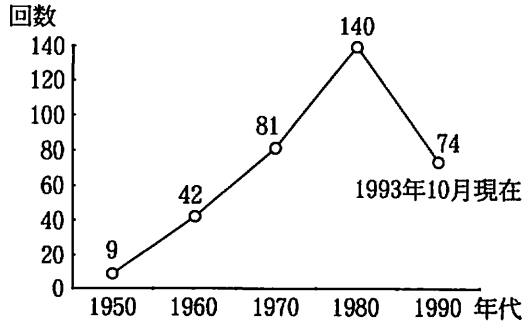


図2　年次別空手道大会数

少年少女大会は1989年の1回大会からの回数も加算されている。

表9　県内流派別空手道場一覧表

項目 / 数	流派別	道場数
1	剛柔流系	72
2	小林流系	62
3	上地流系	48
4	少林流系	39
5	少林寺流系	16
6	沖縄拳法	9
7	松林流	9
8	琉誠館	4
9	一心流	6
10	古武道系	19
11	上記以外の流派	16
計	合計	300

平成5年10月現在

表10　市町村別道場分布順位

順位	市町村	道場数	順位	市町村	道場数
1	那覇市	86	19	嘉手納町	4
2	沖縄市	31	20	北中城村	4
3	浦添市	20	21	佐敷町	4
4	具志川市	16	22	大里村	4
5	宜野湾市	15	23	恩納村	4
6	西原市	11	24	金武町	3
7	糸満市	9	25	勝連町	3
8	石川市	8	26	知念村	3
9	北谷町	8	27	平良市	3
10	南風原町	8	28	玉城村	2
11	豊見城村	8	29	伊良部町	1
12	与那原町	8	30	大宜味村	1
13	名護市	7	31	今帰仁村	1
14	具志頭村	6	32	本部町	1
15	石垣市	5	33	宜野座村	1
16	東風平町	5	34	中城村	1
17	与那城村	4	35	粟国町	1
18	読谷村	4		計	300

表11　県内市町村別道場分布表

項目 数	市町村	道場数		市町村	道場数
1	国頭村	0	29	南大東村	0
2	大宜味村	1	30	北大東村	0
3	東村	0	31	豊見城村	8
4	今帰仁村	1	32	糸満市	9
5	本部町	1	33	東風平村	5
6	名護市	7	34	具志頭村	6
7	宜野座村	1	35	玉城村	2
8	金武町	3	36	知念村	3
9	伊江村	0	37	佐敷村	4
10	伊平屋村	0	38	与那原町	8
11	伊是名村	0	39	大里村	4
12	恩納村	4	40	南風原町	8
13	石川市	8	41	渡嘉敷村	0
14	与那城村	4	42	座間味村	0
15	勝連町	3	43	粟国村	1
16	具志川市	16	44	渡名喜村	0
17	読谷村	4	45	平良市	3
18	嘉手納町	4	46	城辺町	0
19	沖縄市	31	47	下地町	0
20	北谷町	8	48	上野村	0
21	宜野湾市	15	49	伊良部町	1
22	北中城村	4	50	多良間村	0
23	中城村	1	51	石垣市	5
24	西原町	11	52	竹富町	0
25	浦添市	20	53	与那国町	0
26	那覇市	86			
27	仲里村	0		合計	300
28	具志川村	0			

（平成５年10月現在）

表12　海外で活躍している著名な空手専門家

No.	国名	空手家
1	カナダ	嘉陽　宗弘、金城　憲 金城　嘉孝
2	アメリカ	比嘉　照行、新城　友弘 国吉　力、大城　利弘 伊波　清吉、宇江城安盛 山下　忠、東恩納盛男
3	グアム	大城　盛義
4	ハワイ	新川　統
5	アルゼンチン	宮里　昌栄、宮城かおる 比嘉ベニート達、赤嶺茂秀
6	ブラジル	与那嶺育孝、新里　美秀
7	ペルー	諸見里安憲
8	メキシコ	島袋　哲
9	独	大城　善栄
10	フランス	知念　賢祐、高安　武美 安谷屋
11	スペイン	辺土名朝雄、上原　繁 翁長　良一
12	イタリア	翁長　剛

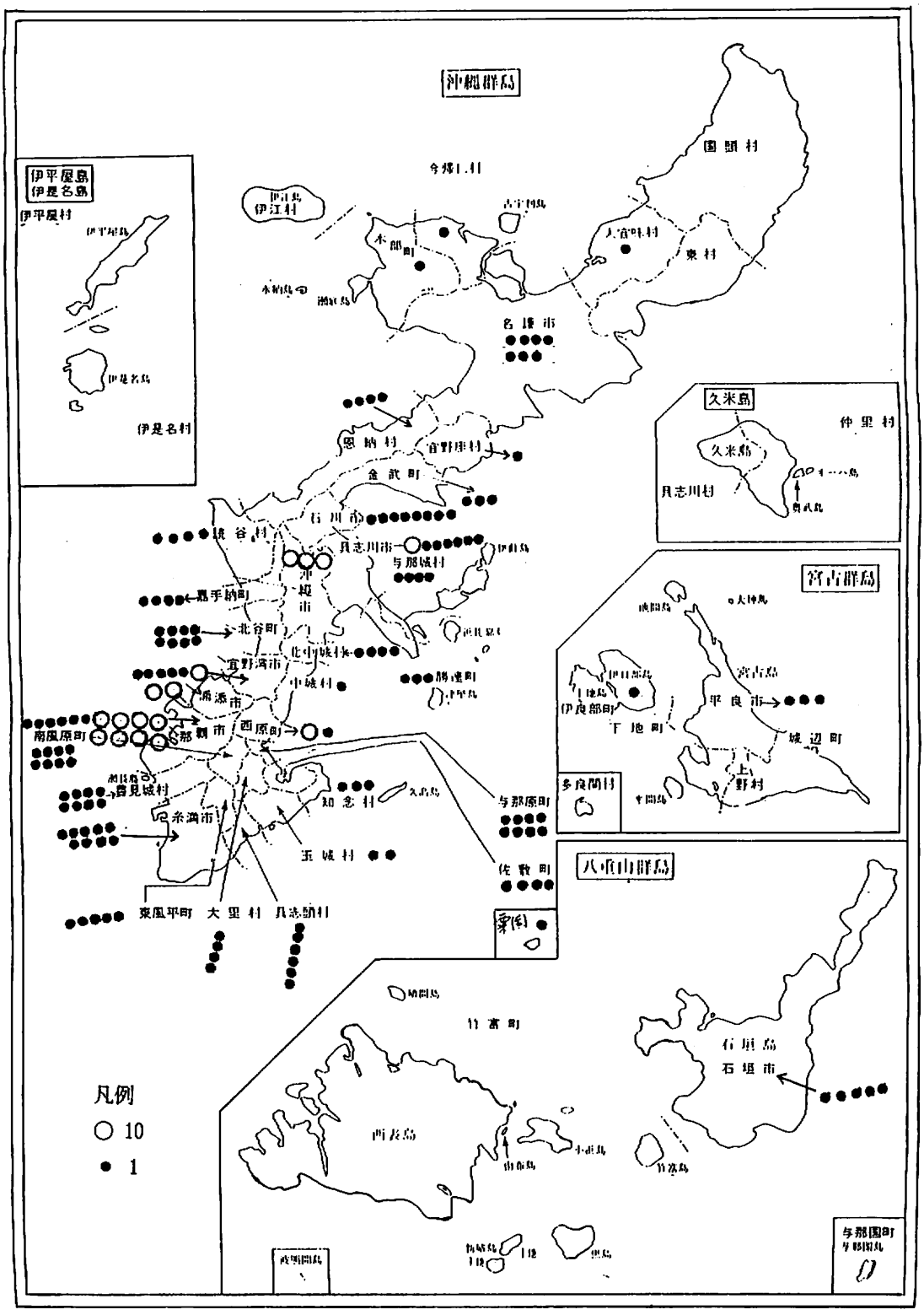


図３　沖縄県内道場分布図（平成５年10月現在）

6　空手に対する連想語とプロフィール

(1)　県人と外国人の空手プロフィール

空手に対するＳＤ調査の結果は図４でみられるように、プラス方向に集中する傾向を示している。「友達ができる」「仲間とのふれあい」の尺度が中性点にあること。「楽しくできる」が評点３にあることは技能中心の練習方法に学習が片寄るなどの修得練習が「型」中心であることを示唆しているものと思われ、今後の課題としてとらえたい。

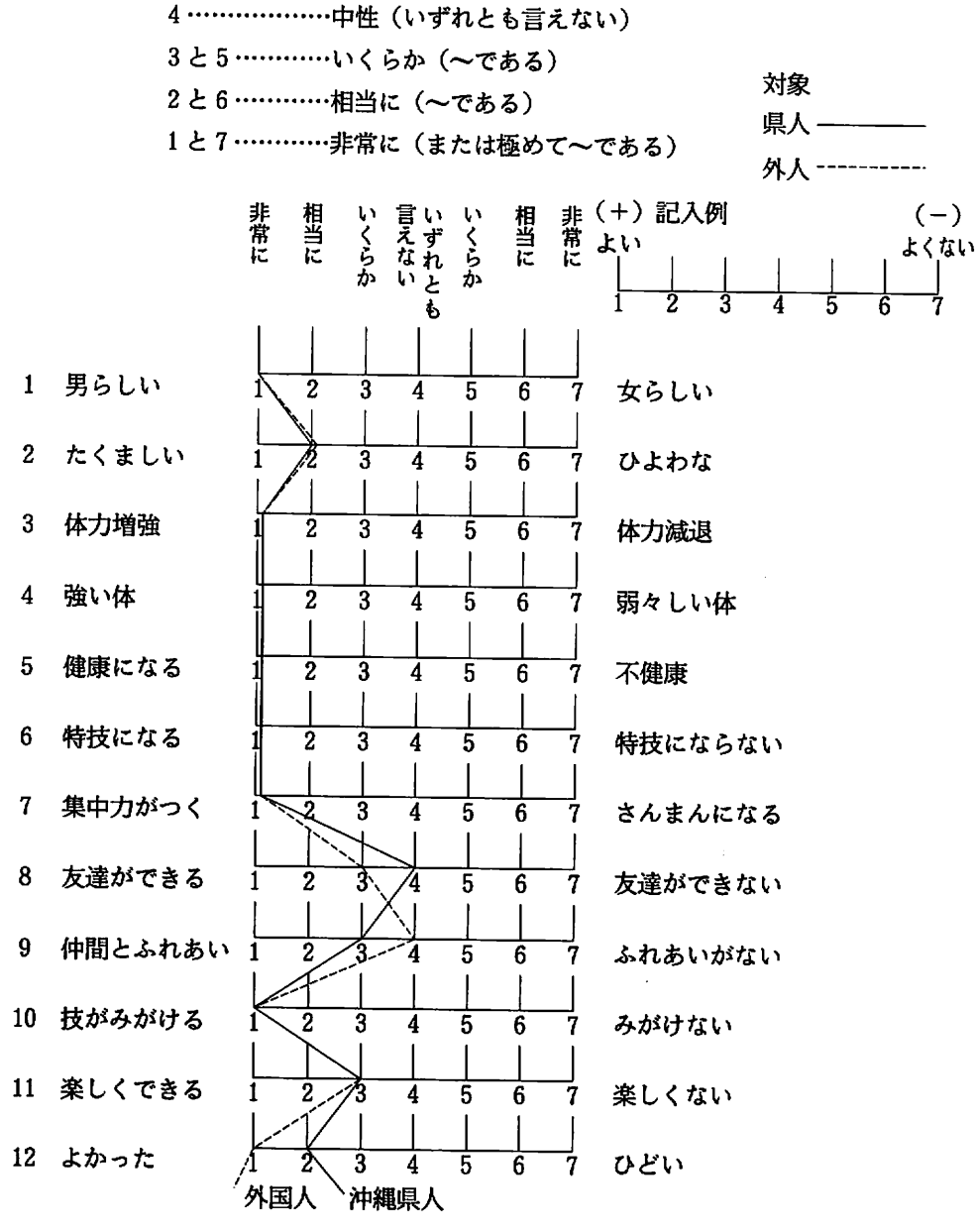


図４　県人と外国人による空手プロフィール図

(2) 空手に対するイメージ、連想語

空手に対するイメージ、連想語を記述させた結果は表13のようになった。空手は、力強い、格闘技で型のよさ、カッコイイなどととらえられており、男性的で力性のあるものとなる傾向にあると思われる。今後更に、調査対象と人数を考慮した調査方法を実施することが望ましいと思われ、課題としたい。

表13　空手に対するイメージ・連想語調査結果

① 小中学生　対象 { 男 10人 / 女 10人 }

② 成人　対象 { 男 10人 / 女 10人 }

※記述方法として1人5秒の時間を与え、3語ずつ書かせた。

① 小学生

順位＼項目	イメージ	男	女
1	型がよい	10	10
2	カッコイイ	10	10
3	おもしろい	10	10
4	力強い	10	10
5	楽しい	10	10
6	組手につかう	10	8
7	強くなりたい	10	4
8	サンドバックをける	8	4
9	きつい	7	7
10	あせをかく	7	3

② 成人

順位＼項目	イメージ	男	女
1	沖縄の文化	10	10
2	護身術と思う	10	10
3	礼儀作法によい	10	10
4	健康になる	10	10
5	はげしい	10	10
6	型がよい	10	10
7	すっきりする	10	10
8	格闘技と思う	10	5
9	演武大会のこと	8	4
10	変化がある	8	2

(3) 空手を実践する動機

空手を実践する動機は、8才～20才までは「強くなりたい」、「親がすすめた」からの意見がある。20才以上は「健康によく」「沖縄の文化として学びたい」としている。空手と健康の関係では、8才～10才までは、「かぜをひかなくなった」「友達ができた」としている。15才～20才は1人でも「楽しめる」とか「組手型」に興味をしめしている。空手を継続するかしないかは8才～10才では「続けたい」、「やめると親にしかられる」、15才～20才は「続けたい」、20才～50才は「健康によい」、「生涯続けたい」としている。演武大会については、いずれも「出場したい」としている。

表14　空手を実践する動機と魅力について

項目＼年令	8才～10才	15才～20才	20才～50才
空手の動機	強くなりたい 健康に良い	強くなりたい 親がすすめた	健康に良い 強くなりたい
空手と健康度	かぜをひかなくなった 友達ができた	1人でも楽しめる 組手試合に出たい	礼儀や心身の鍛錬によい 型の習得
空手を継続するかいなか	続けたい やると親にしかられる	続けたい	健康によい 生涯やりたい
演武発表会の出場について	出たい	出たい	人生経験になる

(4) 沖縄の空手道・古武道を支えてきた先師記録

1700年代から1900年代における沖縄の空手道・古武道を支えてきた主な人名と生誕と沿革を収集して表示したのが表14である。この表を基にさらに空手道・古武道の系譜を検討することにしたい。

表15　1700年代～1800年代の空手道、古武道をささえてきた沖縄の先師達

①

	氏名	年代 1700年代 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90	1800年代 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90	1900年代 0 10 20 30 40 50 60 70 80 90
1	添石　？	1752	1725 73才	
2	佐久川　寛賀	1762 1733	1843 1815 81 2説あり	唐手佐久川と呼ばれた。中国帰りの空手家
3	真壁朝顕	1787	1842 65	真壁鶏（チャン）闘鶏のごとく強い異名をもつ。
4	比嘉親雲上	1790	1870 80	棒術のマチャーヒジャともいわれた。
5	知念親雲上		1797 1881 84	油屋山城の屋号をもつ。
6	松村宗昆	出生不明で以下の説あり。(1798、1800、1805、1809)	1798 1809 1890 1896 92	武士松村の異名でよばれた。
7	宇久嘉隆		1800 1850 50	泊手の達人、松茂良の師。
8	照屋規箴		1804 1864 60	泊手の達人、松茂良の師。
9	多和田真睦		1814 1884 70	
10	仲井間憲里		1819 1879 60	劉衛流、仲井間先生の祖。
11	親泊興寛		1827・1831 1905 78	
12	安里安恒		1828 1906 78	
13	松茂良興作		1829 1898 69	泊手の達人、泊の松茂良とよばれた。
14	糸洲安恒	出生不明で以下の説あり、松村の弟子。(1830、1831、1832) 学校へ空手を導入した。	1830 1914・15・16? 86	
15	山田義恵	泊手の達人。	1835 1905 70	
16	新垣世璋	新垣マヤーといわれた。那覇手の達人。東恩納寛量の師。	1840 1920 80	
17	知念三良	山根流創始。	1840 1922 82	
18	金城大筑	釵の名人	1841 1926 85	
19	末吉仁王		1846 1920 74	
20	湖城嘉宝		1849 1925 76	
21	東恩納寛量	新垣マヤーの弟子、剛柔流の開祖ともいわれる。	1853 1915 62	
22	金城紀任		1856 1898 42	
23	仲井間憲忠		1856 1953 97	
24	山里義輝		1866 1946 80	
25	仲栄真盛吉		1866 1931・32? 66	
26	屋部憲通		1866 1937 71	
27	本部朝勇		1867 1930 63	
28	金城　松	別称、マチャー文徳	1867 1945 78	
29	船越義珍	日本本土へ空手を普及した功績は大きい。	1868・70 1957 89	

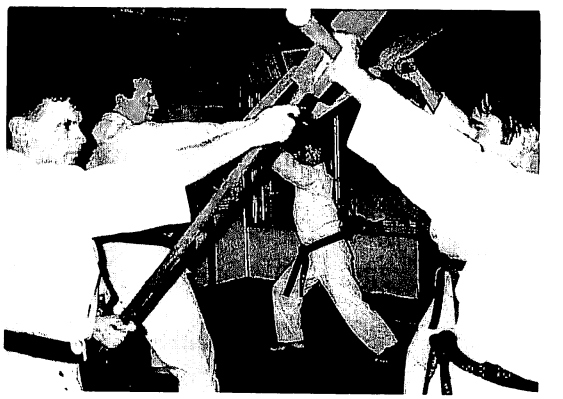
②

	氏名	年代	1700年代	1800年代	1900年代	
			0 10 20 30 40 50 60 70 80 90	0 10 20 30 40 50 60 70 80 90	0 10 20 30 40 50 60 70 80 90	
30	花城長茂			1869	1945	76
31	喜屋武朝徳		チャンミーグワーとよばれた。仲里常延氏の師	1869・70?	1945	76
32	本部朝基		本部サール（猿）とよばれた。猿のごとく身軽でボクサーを倒したことで有名。	1869・71	1944	74
33	久場興保			1870	1942	72
34	比嘉蒲戸			1871	1930	59
35	伊波興達			1873	1928	55
36	上地完文		上地流の祖。上地完英先生の父親	1877	1948	71
37	屋比久孟伝		平信賢の師で琉球古武術研究会創始者。	1878	1941	63
38	知花朝信		宮平勝哉、比嘉佑直、仲里周五郎の諸先生の師。	1885	1969	84
39	徳田安文			1886	1945	59
40	呉賢貴		中国からの帰化（寄川姓となる）。白鶴拳の名手	1886	1940	54
41	許田重発		剛柔流、伊良波長幸氏の師。	1887	1968	81
42	宮城長順		東恩納寛盛の弟子で剛柔流の祖。	1888	1953	65
43	大城朝恕		知念三良の弟子、棒の名人	1888	1935	47
44	遠山寛賢			1888	1966	78
45	又吉真光		又吉真豊先生の父親、師でもある。	1888	1947	59
46	摩文仁賢和		糸東流の流祖。	1889	1952	63
47	祖堅方範		松村ナビ師の弟子で祖堅タンメーといわれ、鎖、棒の名人	1890・91	1982	92
48	宮平政英			1890	1956	66
49	城間真繁			1890・91	1954・57?	67
50	仲本興正			1890	1967	77
51	伊波興盛			1891	1967	76
52	仲宗根正侑			1893	1983	90
53	中村茂			1893	1970	77
54	渡口精仁			1895	1937	42
55	友寄隆優			1897	1970	73
56	平信賢			1897	1970	73
57	比嘉世幸			1898	1966	68
58	名嘉真朝増			1899	1982	83
59	新垣安吉			1899	1929	30

◎その他の先師の方々に松村ナビー、外間親雲上（屋部）、喜友名親雲上、知念志喜屋仲、崎由、国吉、幸良、津堅親方、宜野湾殿内、宮里、當山、仲村渠、顔名波、具志、友寄、浜比嘉、宇久田、佐久間、桑江、それに北谷屋良の名があるが後に調査したい。

沖縄空手の海外における研修会講習会状況写真　①

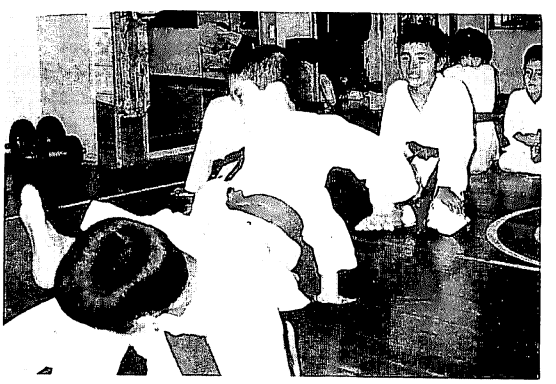
（写真１）アメリカ国（ニューヨーク州）とカナダ国（トロント州）からの合宿、トンファーの稽古「徳山のトンファー」



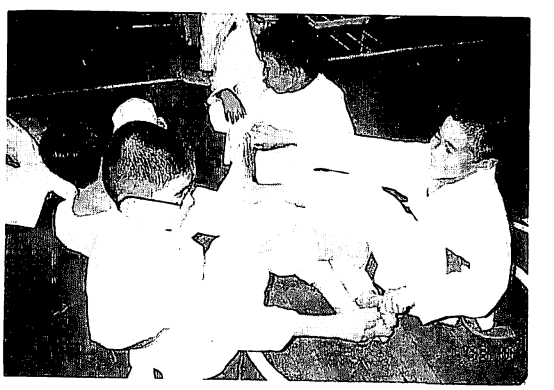
（写真２）「越来のウェーク手」の稽古

（写真３）稽古の合間をぬってのひととき
明朗で外国人にもすぐなついた

（写真４）休息の後は、また真剣な型の稽古
へ表情が一瞬のうちに変わった。

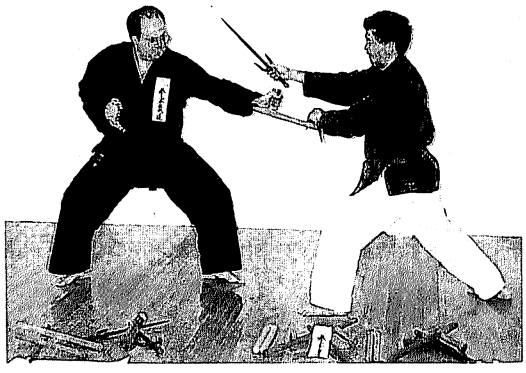


（写真５）組 手 試 合
右側の相手の上段、けりをかわし左側の
回しけりがきまり後方へ尻もちをつく



（写真６）拳志会でケリの鍛錬方法
を取り入れた「準備運動」

沖縄空手の海外における研修会講習会状況写真　②



（写真７）アメリカ国（ミネソタ州）
サイとエークの組手、対するは
ミネアポリスの警察教官ピータ氏
「知花のサイ」対「徳山のトンファー」

（写真８）
アメリカ国（ミネソタソ州）六尺棒の組手
「棒　術　第　一」

（写真９）　イギリス国（ウェルズ地方）
小学校における空手「型」のトレーニング

（写真10）
アメリカ国（カリフォルニア州）
教材型の指導、クレリモンテ高校にて

（写真11）西原町剛柔流拳志会少年部
「ゲキサイ第一の型」

（写真12）西原町剛柔流拳志会での稽古
古武道の型「大城の棍」

付　　記

生涯スポーツとしての沖縄の伝統的スポーツ・「空手」に着目し、生涯スポーツとしての沖縄空手を検討する（その一）として、県内の空手人口の動態の実態を把握することを基礎であると思われ検討してきた。

生涯学習としての伝統スポーツの一つである「空手」については、空手スポーツ青少年少女団の育成や広く一般市民が楽しく、健康で継続できる空手スポーツ学習会等についても今後追求し検討していくことが課題である。

文　　献

1）The Essence of okinawan Karate by shoshin Ngamine 1976
2）外間哲弘　金城政和　沖縄の古武道具鍛錬道具　琉球新報社 1989
3）波多野完治　生涯教育論　小学館　1972
4）大幸財団編集委員会　生涯教育実践論　財団法人大幸財団芦田淳　平成3年
5）沖縄県教育委員会　沖縄県の児童生徒の体力体格の実態資料　1990
6）琉球新報社　県内スポーツ動向　1990
7）沖縄タイムス社　各種スポーツ資料　1980
8）外間哲弘　沖縄空手道の歩み　1984